



## 年間第 5 主日 (ルカ 5:1-11)

イエスのことばに信頼し、一歩踏み出す

年間第 5 主日 C 年、「漁師を弟子にする」場面が選ばれました。「先生、わたしたちは、夜通し苦勞しましたが、何もとれませんでした。しかし、お言葉ですから、網を降ろしてみましよう」(5・5) ペトロの勇氣ある答えに、私たちも耳を傾けましよう。

先週マラソン大会の報告を少しだけしましたが、お恥ずかしい話がかくっついていまして、ついでに話したいと思います。53分42秒で走り終えて、完走した人から順に、司祭館と信徒会館のお風呂を開放してひとまず着替えることになります。希望者は「コンカナ王国」というホテルの大浴場に連れて行ってもらえるのですが、私は福江でのマラソンを終えてすぐ上五島に船で移動し、実家に帰ることを優先したので、教会信徒会館のシャワーだけ浴びさせてもらったのです。

疲れていたのでしょうか。またもやここで着替えを持たずにシャワーに入ってしまったしまして、信徒会館から司祭館に戻って着替えるまで、グチョグチョに濡れた服をまた着て戻りました。司祭館で慌てて着替え、上五島行きのフェリーに乗るために若い司祭にターミナルに送ってもらったのですが、フェリーの中で荷物を確認したら、なんとマラソンで着ていた服がリュックに入っていないのです。

レジ袋に放り込んで、司祭館の応接室に置いたまま、司祭館を出るという失態をしでかしました。福江教会の助任の山内啓輔神父様に、「すまんけど、これこれの忘れ物をしたので送ってくれ」とお願いする羽目になりました。きれいに洗濯を終えて戻ってきましたが、私のパンツ、山内神父様が選択してくれたのでしょうか？

マラソン大会のコースは堂崎天主堂から福江教会まで約9キロあるのですが、楽々走り終える人は別として、私のように最後は氣力もなくなるようなレベルの人は、振り返るとよくまあ最後まで走り終えたなど我ながら感心するのです。残り3キロあたりで氣力体力をすべて奪い取るような坂道が待っていて、去年もそうでしたが、今年もこの坂道をどのように登り切ったのか、全く思い出せないくらい疲れ果てました。

何も考えられないくらい疲れていましたが、それでも何かしら、希望はあったのです。なぜならその坂を登り切ると、あとはゴールまで2キロとなり、確実に終わりが近づくからです。自分で勝手に「地獄の上り坂」と名付けていますが、この坂を登り切る力はどこから来たのかと考え直しました。

もはや氣力も体力もなくなった頃にこの「地獄の上り坂」がやって来るわけです。体力とか、氣力を超える何かが、背中を押してくれた。そうとしか考えられません。私はその「何か」を、ペトロの言葉から考えてみたのです。「先生、わたしたちは、夜通し苦勞しましたが、何もとれませんでした。しかし、お言葉ですから、網を降ろしてみましよう」

(5・5)

ペトロもまた、夜通し働き、体力も気力も残っていませんでした。何をどうやっても、結果を出せるはずがない所まで追い詰められていました。それなのに、「お言葉ですから」そう言って、網を降ろしたのです。釣りをする人はよく「最後の一投」とか言って仕掛けを降ろしますが、ペトロは最後の一投はすでに降ろして引き返してきていたわけで、さらにもう一回網を降ろすのは自分のためではなくイエスのためだったのです。

すると状況が一変しました。「おびただしい魚がかかり、網が破れそうになった」(5・6)のです。

もはやペトロの気力体力の延長線上には何も期待できませんでした。全く違うものに信頼を寄せて、一步踏み出したのです。ペトロの延長線上ではなく、これから始まる「イエスのことば」に信頼を寄せて、歩き出した。そこで状況は一変しました。

私も、それに近い感覚をマラソンで味わいました。もはや自分の気力体力は「この地獄の上り坂は登れない。生まれて初めて、歩いてこの場をしのごう。」という誘惑に駆られていたわけですから。自分の気力体力の延長線上では、もはや乗り切ることは無理だったのです。

しかし、何かが背中を押してくれました。全く違う何か。言い過ぎかも知れませんがそれが、「イエスのことば」なのだと思います。「ここで歩いたら、田平教会の今年一年の司牧活動も、肝心な時に歩くことになるぞ。それでもいいのか。」言葉に表せば、そういうことでしょうか。

状況は一変しました。坂を登り切って、急に元気が出てきました。どこにこれだけの元気が残っていたのかと思うくらいです。それは、坂を歩いてからでは決して得られない劇的な変化でした。あのときの体験があるから、戻ってからの司牧も頑張れますし、ここだけの話ですが、ルームランナーも今も続けて30分40分のトレーニングを積み上げています。

ペトロが体験したことは、「イエスの言葉に信頼を置いて一步踏み出すと、状況はすっかり変わる」ということです。ペトロが持っている気力体力の延長線上にはもはや希望は何も見えなかったのですが、そんな中でイエスのことばは人に希望を与え続けるのです。

私たちがどんなにこの先続けても希望が持てないと考えるのは、自分の気力体力、知力の延長線上で物事を考えているからだだと思います。全く違う道があります。イエスのことばに信頼を置いて一步を踏み出すということです。

イエスは今も、私たちにことばを掛けて、「わたしを信じる者は決して乾くことがない」(ヨハネ6・35)「わたしを信じる者は、死んでも生きる」(同11・25)「わたしを信じる者は、わたしが行う業を行い、また、もっと大きな業を行うようになる」(同14・12)と招き続けているのです。イエスのことばに信頼を置くかどうかはあなたに委ねられています。